みやこ町歴史民俗博物館

博物館だより

MIYAKO TOWN DIGITAL MUSEUM
www.miyako-museum.jp

No.136

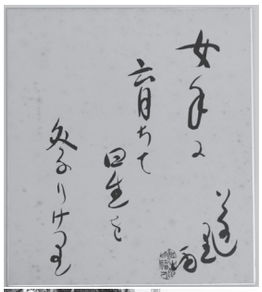
平成30年３月１日
みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
ＴＥＬ０９３０－３３－４６６６
ＦＡＸ０９３０－３３－４６６７

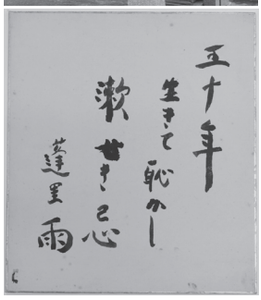
博物館オススメの逸品レポート この展示（&収蔵資料）ココがみどころ、ココがツボ Vol.22

●小宮豊隆資料「漱石コレクション」小宮豊隆（俳号「蓬里雨」）作〝漱石縁句〟色紙

小宮豊隆は「自他ともに許す漱石門下の筆頭」とされる一方、「漱石神社の神主」とも評され、漱石への敬愛の念は時に度を越し、漱石本人にたしなめられるほどだったと言います。それだけ小宮にとって漱石が大切な存在であったことが分かるのですが、その出逢いと別れ、特に漱石没後の敬慕の念が、いかなるものであったのかは小宮が詠んだ俳句によく表れています。

小宮は豊津中学在学中に漱石の存在を知り、『猫』連載時には熱心なファンになっていました。上京して本物の漱石に面会し、自身のおとなしさを母子家庭由来に詠んだ「女手に…」の句を披露したところ激賞され、この句が漱石との結縁となりました。その後十数年の交誼を経て大正五年（一九一六）、師の臨終に立会い、翌年から『漱石全集』の編纂に着手します。以後四十年近く改訂を重ねる全集や類書を編み続け、それでもなお追い付かぬ師の偉業を偲び辞世を詠んだのです。





▲上:結縁句「女手に育ちて星を祭りけり」
中:上の句を刻む文学碑（育徳館高校内）と小宮豊隆墓碑（豊津［峯高寺］）
下:絶筆「五十年生きて恥かし漱石忌」

◆講座・教室・催し物ガイド

3月の歴史講座

【漢詩紀行講座】
3月3日（土）　9時30分～

【古文書講座】
3月10日（土）　10時00分～

【古典かな講座】
3月17日（土）　9時30分～

【みやこ学講座】★現地見学会
3月17日（土）　8時30分～

※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途ご案内します。

春からの「学び」ガイド

①歴史講座
郷土にちなんだ資料の講読を始め、町内外の文化遺産探訪を行う講座があります。

②文化遺産ボランティア養成講座
町の宝を自分達の手でガイド&ガードできるよう「楽習」する講座です。今年は調査にもチャレンジ予定です！

③博物館友の会
「故郷を楽しく学ぶ」をモットーに「バスハイク」や「歴史たんけんウォーク」など様々な催しを行っています。

♪お申込み・お問合せ
みやこ町歴史民俗博物館
☎0930-33-4666

１月の業務日誌から

▲管弦楽の美しい音色がホールに響き渡りました

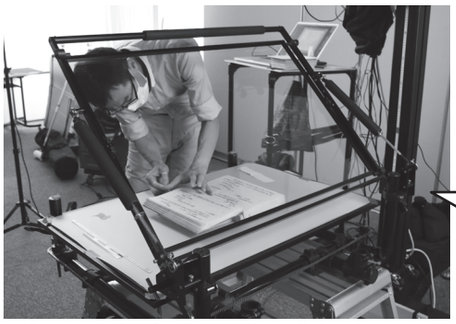
28日（日）、「明治150年」をテーマに歴史文化カレッジが行われました。
第一部では“明治人が出会った西洋音楽”と題して育徳館高等学校管弦楽部のみなさんによる演奏会。
第二部は“郷土と明治”をテーマに講演会「館蔵資料を通してみた明治」と「堺利彦を通して見た明治」でした。
どちらにも多くの方に来場いただき、“明治”を感じていただけたようです。

▲小正路先生には硬いテーマをユーモアを交えて軽妙にお話し頂きました

26日（金）、片島小学校3年生のみなさんが「昔のくらしと道具」学習のため博物館に訪れました。当日はボランティア養成講座の実習も兼ねた見学会となり、受講生は説明の様子を見学しながら自分たちのデビューにも備えました。

▲昔の道具を間近で見学しながらメモをとる児童たち

29日（月）、朝鮮通信使関係の資料をはじめとする「小笠原文庫」の一部をデジタル化するための撮影作業が研修室で行われました。
まちのお宝をデジタル化することによって資料活用の幅が広がることになり、今後の展開が楽しみです。



▲撮影時にゆがみがでないよう慎重に作業を進めます

みやこの歴史発見伝104
小倉藩 朝鮮通信使 対馬（易地）聘礼記録

―「小笠原文庫」に残された、隣国との誠心外交の「記録と奇縁」―

朝鮮半島との交流は 今も昔も変わらぬ関心事

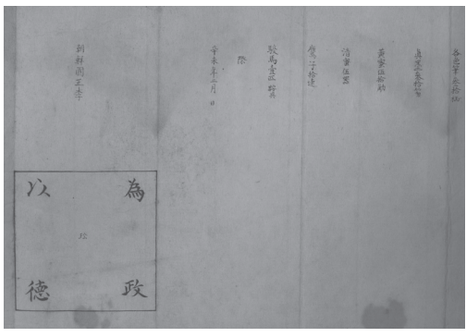
平昌オリンピックが終わっても、ひきつづいてのパラリンピックや予断許さぬ北朝鮮情勢など、私たちが朝鮮半島との交流や動向に心を砕くのは今も昔も変わらぬことのようです。そのことを象徴するともいえる歴史資料が、わが町に在って、それが「人類が共有すべき貴重な記録」としてユネスコの『世界の記憶』に登録（H29・10・31）されたことをご存知ですか？

育徳館高校錦陵同窓会から当館に寄託されている歴史資料「小笠原文庫」中の右タイトルの資料群がそれです。

なお、これらの資料が当館で『世界の記憶』に登録された経緯には「時代の縁・時の計らい」ともいえる奇縁があり、その概要は次の様なものとなります。

平和回復使節・朝鮮通信使を 迎えた小倉藩

文禄元年、天下統一を果たした豊臣秀吉は、次の目標を「唐入り（大陸制覇）」として、二度にわたって通路となる朝鮮へ出兵、同地で「倭乱」と呼ばれる悲惨な戦乱・混乱を引き起します。



▲朝鮮国王李珥国書別幅控（友好の進物リスト［部分］／登録外資料）

秀吉の死で戦乱は収まりますが国交は断絶、隣国でありながら物心の交流が途絶える異常事態となります。これの収束を図るべく編成されたのが、修好回復のための使節団「通信使」です。仲介した対馬藩の奔走で、戦後処理の名目で朝鮮からの使節派遣が実現、第一回通信使は、徳川家康・秀忠のもとを訪れ、戦争で拉致された朝鮮人らの帰国手配と共に、今後の不戦のための交渉を約しました。その努力が結実し、やがて通信使は善隣友好や文化交流を主目的とするようになり、その最後を飾ったのが文化八年の通信使です。

このときの通信使は、経費節減を目的に易地（場所の変更。この時は対馬）で実施され、この際の上使（幕府代表）を小倉藩第六代藩主・小笠原忠固が務めました。

「将軍一代の盛儀」とされた通信使の応接は、幕府や藩の威信をかけたイベントで、その準備や対応に当事者は勿論、通信使が通過する沿道の諸藩も「最高級のおもてなし」を図るべく心を砕き、莫大な費用と人員を注ぎ込みました。今回の資料群はその折に制作されたもので、小倉藩が行った通信使の応接は勿論、沿道諸藩や幕府・対馬藩との連携や調整・対応の事績が事細かに記録されています。

▲今回「世界の記憶」に登録された資料群（5件［6冊］）

資料上でみてもその運営は大変なものだったと偲ばれますが、その分世間へのアピール効果は絶大で、庶民は通信使の来訪を、オリンピックのような「今生に一度は見ておきたい（世紀の）大イベント」と捉えており、小倉藩は無事その任を全うします。

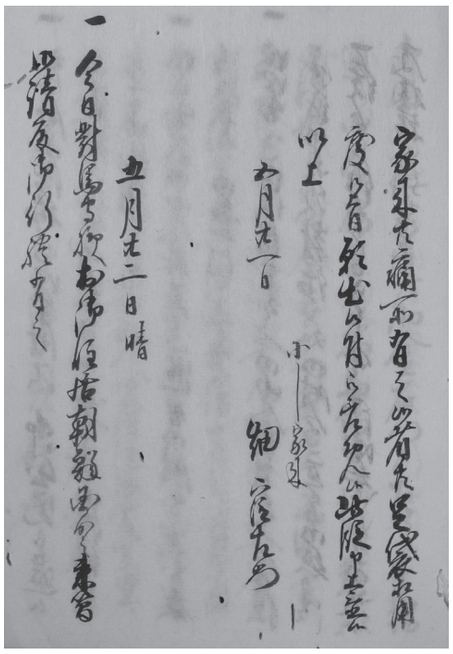
通信使に関わった 小倉藩の「その後」

通信使応接の成功は、幕府内での立ち位置や発言力を上昇させる効果も期待されたようで、任務を全うした忠固はその後、幕府要職の「老中」就任を画策。多額の工作費をばらまいて藩財政を傾けながらその野望を実現しかけた折、これに反発した家臣団の一部が、小倉城下（＝白●）を出奔（脱走）して筑前黒●崎へ走り、家臣団が二つに割れる騒動（文化十一年「白黒●騒動」）を引き起こしました。

この騒動は幕府の知る所となって忠固は逼塞処分を受けた上に、家臣団は分裂したまま反目を続け、これが幕末の動乱を乗り切る行動力を欠く原因になったとも言われています。

明治二年、長州藩に敗れて錦原へ退去した小倉藩は藩名を「豊津」と改め、新時代を藩校・育徳館を拠点に人材の育成によって切り拓こうとしますが、廃藩置県で豊津藩は消滅します。しかし育徳館や後身の豊津中学での人材育成は続き、近代日本を牽引する人材を多数輩出したことは周知の通りです。

なお、育徳館は人材育成とともに、近隣に図書館や博物館のなかった時代にその役割も期待されたようで、「小笠原文庫」をはじめとする貴重な資料の受入先にもなりました。その結果が今回の『世界の記憶』登録に結実したようで、数奇な「歴史の縁」を感じます。（木村達美）


▲登録資料群中の「対州（＝対馬）御在館中日記」
5月22日の国書受け取りとともに、その際近侍する足の痛む家臣へ、足袋着用を許可する備忘を記す